

播磨古法華石佛概観

田岡香逸
高井悌三郎

はじめに

播磨國の東部を流れる加古川は、その上流は丹波國に發する佐治川と篠山川を合せ、中流において杉原川、東條川、満願寺川を、更に下流において美嚢川を入れ、末は播磨灘に注ぐ當國第一の大河である。その満願寺川の支流下里川に沿うて西すると北條盆地に入るが、その入口に近く右岸に連る善防山と笠松山に懷かれる古法華山の中に一字の觀音堂がある。境域は加西郡北條町西長^{おさ}に屬し、堂は同町尾崎の曹洞宗多聞寺の管理する所である。

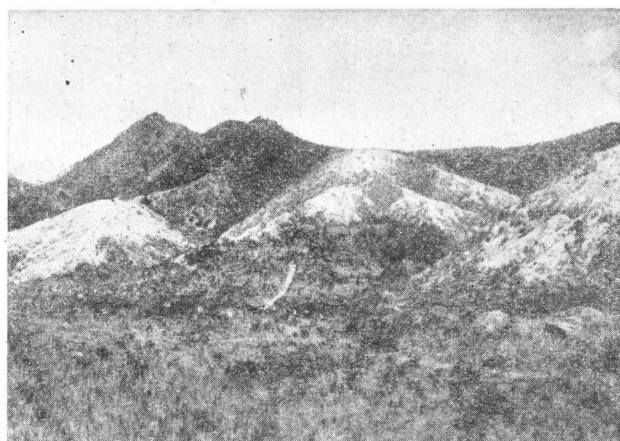
南方約四軒を距てて、西國第二十六番靈場として有名な法華山一乗寺があり、交通は加古川線の支線北條線播磨下里驛が最も近く、約三軒で達するが、嶮しい峠を越えて行く谷間にあるため、時たま土地の古老が詣る外今は訪う人も稀である。昨冬私達は偶然の機會でこの地を訪れ、ここで奈良朝前期所謂白鳳時代の石佛を發見したのであるが、これがその後度々の調査によりたぐい稀な、我が國最

古最優秀の石佛であることを確認するに至つた。その詳細は調査報告書に譲ることとし、ここに取敢えずその概要を報告し、石佛の實狀を少しでも明らかにしたいと思う。

尙この調査に當つて與えられた梅原末治・藤島亥治郎・福山敏男・黒田源治の諸博士始め諸先學の御指導と、地元の古家實三・幸田幸一、一乗寺住職太田實承、多聞寺住職奥村湛堂の諸氏始め有志の方々の御後援と共に、執筆を勧められた福山博士の御好意に對し、先ず御禮を申し上げておかなければならない。

一 發見のいきさつと附近の概観

私達の播磨國の調査は、漸く加古川中流地域を越し加西郡に入ることになつたので、その據點を北條町坂本の法華山一乗寺におくこととし、昨年（昭和三十年）一月上旬第一回調査に出向いたのであつたが、六日の午後を同地小谷安治氏所藏重要美術品一乗寺境内出土磚佛に當て、古家實三氏の案内で調査中偶々同氏から、北方約四軒



挿圖 1. 所在地の景觀

の山中に古い石佛のあることを教えられ、急に豫定を變更して氏の案内を乞い、

初めて古法華の地を訪れたのであつた。坂本から猫尾に出、善防山の西の谷に沿

い、峻しい坂を攀じて峠に立つと、眼下に古法華の谷が展開している（挿圖1）。遙に見渡すと山肌は荒れ果てて樹木が無く、満目荒涼たる中に僅に一叢の木立が

あり、この石佛を本尊として安置する観音堂の屋根が隠見している。急峻な山稜を傳つて降り、ささやかな溪流に沿うて少し行くと北岸に臨み一段高く山の尾に建つ観音堂に達した。傍に建つ庫裡と共に新しい建物であるが、近年無住となつて荒れるに委かせている。

時に四時半であつた。餘りにも荒涼たる光景にあきれ果てて、無理をして來たことが後悔された私達は縁にもたれて一息入れ、見るとはなしにあたりを見廻していたが、ふと目に留つたのは古色蒼然たる石造厨子の屋蓋である（挿圖2）。即ち堂の脇に無造作に石の臺をし、その上に置かれた屋蓋は屋根の構造所謂鍔葺で、行基葺の瓦

を一枚一枚克明に刻出し、大棟の兩端は大きく缺損しているが、一見かの法隆寺の玉蟲厨子を髣髴たらしめる。私達は一瞬我を忘れて見入ると共に、既に石佛の尋常でないことを直感した。

やがて古家氏に呼ばれて我に返つた私達は堂内に入り、粗末な木造厨子に安置された石佛に對したが、果して直感的中していた。痛ましい程破損しているが正しく三尊佛で、その像容又焼けた法隆寺の金堂壁畫を連想せしめ、私達は暫し聲も出ない程であつた（圖版二）。

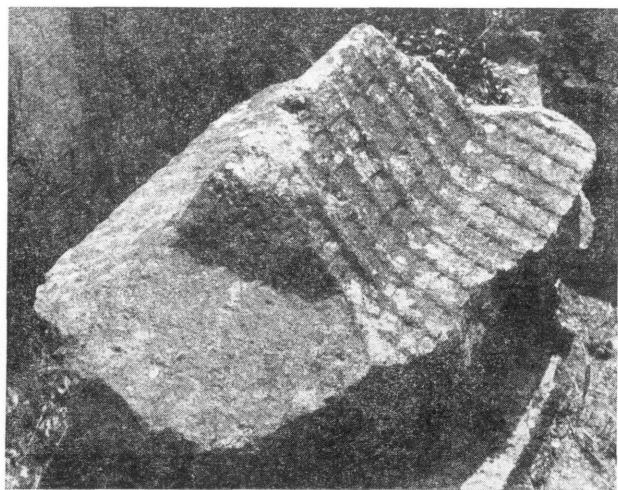
冬の日の暮れるのは早い。いつしか谷は夕靄に包まれ、善防山の上に淡い満月が懸つていた。私達は終列車の時間迄拓本を取ることとし、古家氏には一足先きに引揚げてもらうことにした。これ程古くこれ程精巧な石佛が、今の日本に残つていようなどと、誰が想像することが出来るだろう。その石佛を古家氏の親切な案内によつて、私達は見ることが出來たのである。私達は押え切れない感謝の念をもつて、獨りもと來た道を引返す氏の後姿が夕靄の中に消えた後も、暫くは堂外に佇んで見送つた。

やがて昏黒の堂内に入り、懷中電燈の光を便りに一部拓本を取つたのであるが、一拓毎に紙面に再現する蓮座・衣文・肢體の拓影に、又しても嘆聲を洩すのであつた。暫くは寒さも空腹も忘れ拓本に夢中であつたが、やがて終列車の時間が迫つたので打ち切り、後髪を引かれる思いで月明の山路を急いだことであつた。

その後私達は幾度か調査に出掛けた。多くは播磨下里驛から善防

山の西の谷を登つて行つたが、この方は坂は急峻であるがその距離が短く、殊に峠は切下げて切通しになつてゐるため、比較的樂な道になつてゐるからであつた。ここに切通しが開かれたのは明治三十二、三年頃のことであるが、これによつて當時古法華信仰の盛んであつたことが想像されると共に、猫尾より登る南口よりこの切通しを経る北口の利用が盛んであつたことが窺えるであらう。

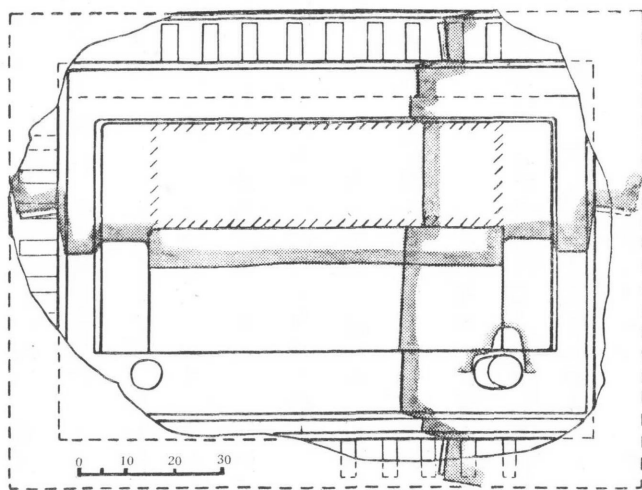
もと加西郡は加東郡と合せ賀茂郡であつた。この郡が播磨國風土記に見える鴨國に當ること云う迄もなく、その政治の中心が加西郡であつたらしいことが、又色々な點から想定される所である。例えば加西町玉野新家にある指定史跡玉丘古墳はこれを風土記に見える



挿圖 2. 石造厨子屋蓋

國造許麻の女根日女命の玉の丘の墓に當てることの當否は別としても、兩郡に數多い古墳中王座を占める大前方後圓墳であり、降つて奈良朝以前の廢寺の分布について見ても、加東郡が土橋廢寺と新部廢寺の外に近年私達が發見した河合廢寺を加えても三ヶ所であるの

に對し、加西郡には吸谷・殿原・繁昌・野條の四ヶ所が數えられる。^註更に又この八月、ここから東北約八軒を距てた繁昌廢寺の近くで私達は奈良朝前期に屬する五尊石佛を發見してゐるが、その位置からしてこれが繁昌廢寺關係のものと推定されるので數に入れないとしても、今一つ南方約四軒の同じ北條町坂本の法華山一乘寺は、法道仙人の開基と傳えるこの國屈指の古名刹で、今も奈良朝前期の本尊とその前立の二軀の銅造聖觀音立像の外に、奈良朝の小金銅像若干を藏している。以上が奈良朝以前の加西郡の概況であるが、この歴史的環境の中において我が古法華石佛は發見されたのである。



挿圖 3. 石造厨子屋蓋軒裏天井部説明圖
(斜線部は三尊像板石はめこみ部、尺度單位釐)

二 石造三尊像

註 鎌谷木三次氏著
「播磨上代寺院社の研究」による。

先ず石造三尊像について述べよう。これは部厚い凝灰岩の板石に刻まれているが、今は火中して表面が痛ましい程荒果て、全體に黒ずん

だ赤褐色を呈し、三尊は天蓋と共に剝落して僅にその痕跡を留め、板石自體が又幾つかに破れているのを、木造厨子の枠に納めてその崩壊を防いでいる。

板石は豎一〇二糎、横七二糎、厚二〇乃至二一糎、その表面兩側と下端に二・五糎幅の薄い(〇・一糎程)縁どりがあり、その中に諸像を造顯している。三尊像は中尊倚坐し、兩脇侍は心持ち腰を捻り、片足を少し遊ばせて蓮華座上に立つている。脇侍の頭上には夫々三層の寶塔が配され、その間に吊された天蓋は全然剝落し、無殘にもその跡を漆喰で埋めている。三尊の下には中央に香爐形が置かれ、その左右に相對して獅子を現わし、夫々頭上に脇侍の蓮座を支えている。三尊様式としては實に整うた構圖を示している。

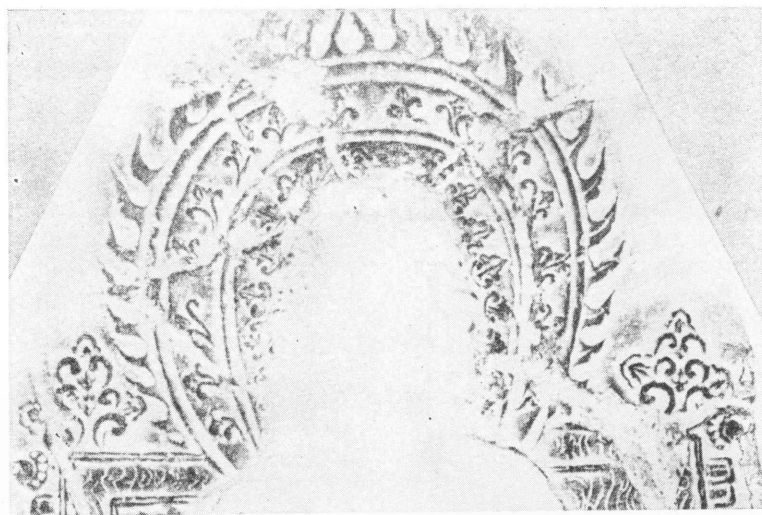
中尊はその身部や蓮座が殆ど剝落し、ただその輪郭が窺われるに過ぎないが、身の丈約五七糎、倚座に腰を掛け、兩足は揃えて蓮座上に載せ、右手は高目に、左手を腰近く置いた姿勢である。頭部は螺髻、後の光背は卵形に近い圓光背で、その内部を華文又は唐草文で飾り、外縁に火焰形を付けている。その光心部の華文は、正面形の廣い葉形がその葉柄部で上向きのC字形に支えられるような形であり、その外側のものは葉形が小さくなり、それが左右に分れて反轉する軸に支えられており、唐草文ではあるが、所謂飛雲文に近い形である。外縁の火焰は左右から全面的に付けられているが、焰は短く又多少の形式化が見られる(挿圖4)。

倚座は光背と共に残つている。中尊は敷物を重ねた上に腰を

掛け、その敷物が一つ足に沿うて垂れている。座板の小口はその上端は缺けているが、そこに小さい華文を容れ、それを支えるように忍冬文が延び、この忍冬文の中にも又廣い葉形、即ちパルメットが組入れられている。これを支える柱狀の脚は、その主部は徳利狀を呈して花座に載るが、その花座は丸い蕾が開いて花瓣が反つているのを、側面に鋸齒文帶を廻らした圓形の基壇に伏せた形である。背障は方形の輪郭の内に波狀文を線彫にし、その外側は兩肩の忍冬文から始り、五瓣の花形に蕾の載つた寶珠形、花瓣狀の方形、耳朶様の曲線、蕨手狀の忍冬文を連ねてこれを飾り、この忍冬文にも同じようにパルメットの組合せが見られる。

兩脇侍も又佛身部は殆ど剝落して仔細は判らないが、身の丈共に四五糎餘、堆く浮彫りされた蓮座上に、夫々腰をやや捻つて立つているが足の遊びは餘り目立たない。兩腕もこれに應じ、共に中尊側の手は曲げて蓮花二莖を捧げ、反對側の手は夫々垂れて軽く天衣を抓み、その裾を翻している。裳は短か目で足首が露出し、その裾は翻つて裳を重ね、兩足の所に薄い波狀の裳を垂らし、その左前は捲れて兩足の間に三條の裳が作られている。

頭部は髪を後に搔上げ寶冠を付ける。寶冠は兩耳の上に八瓣の華文を二つ重ね、その上には蕾様が載り、それから額に沿うて忍冬唐草文が連り、兩方が合して正面にパルメットの葉形を形作つているようである(挿圖5)。光背は共に飾りのない圓光形式であるが、左脇侍のものは寧ろ卵形に近い。蓮座は堆く浮出た(五糎)請花で、



挿圖 4. 中尊光背拓影

香爐形は中央の山形を剝落しているが左右に枝葉が分れ、その間から寶珠形が延び出、半開の花形をしている。これ等を束ねるようにその元に堆く横帯が廻り、更にこれを支える臺座がある（圖版二の下）。

中尊の頭上には、天蓋の瓔珞の寶珠形が一つ残っている。



挿圖 5. 右脇侍寶冠拓影

前面に大様の單瓣を刻み、側面には細目の花瓣を重ね、下端には蓼狀に薄い花瓣を付けている。

この蓮座を支えるように獅子像が相對して跳躍し、その顔は横向きに俯し加減である。尾は後に振立て、片肢を前に上げて中央の香形爐に觸れようとしている。

丸く膨んだ蕾形で、三葉に刻んだ蓼に支えられている。

その左右に半肉で陽刻された三重の寶塔は、幸にもよく残つて全容を示している。向つて右塔は高二八釐、立體的に方形の二面が現わされ、基壇は二重に作られ、下壇は夫々一區として格狹間を一つ入れ、上壇には堅連子を嵌め上に勾欄を現している。この上壇と勾欄の手法は初層の軸部を逆にした形を示し、右のように二重の基壇と見るにはやや難色があるようであるが、果してどうであらう。

初層は一面を二間に區切り、連子窓を付け、圓柱の上に斗拱を載せている。軒は二軒に作り、檼は共に斷面方形でその間隔は密である。二三層にも連子様の勾欄を刻み、中間の柱は省略しているが斗拱は残している。各層ともに屋根は放射狀に瓦棒を並べ、軒先は反らずその出は淺く、全體に丸く短か目になり、隅には夫々風鐸が吊られている。屋頂には一段の輪形を貫いて刹が太く延び出、薄い輪形が四つ重なり、その先に請花・寶珠が刻まれている。全體に塔形が丸味を帶び、手法も又左塔とやや趣が異なっている。

左塔は高二八・五釐、一重の基壇は同じく側面を一區として大きく格狹間を入れ、軸部も又一間になつている（挿圖6）。初層では連子窓を二區とし、圓柱の上の斗拱は大きく雲狀に刻み、方形の檼を二重に密に並べ、二三層の勾欄と屋根の手法も又右塔と似ているが、ただその軒先はやや反りを見せ、その出は右塔に比べて深目で、各層の軒隅には同じく風鐸を釣り、その舌が大きく刻み出されている。相輪は右塔よりやや長くなり、屋頂二段の輪形を貫いて延

出た刹にも又四輪を付け、その上に請花、寶珠を刻んでいる。その請花は右塔が菊花狀に蕾んでいるのに對し、これは花瓣が延び、外に反つて大柄である。

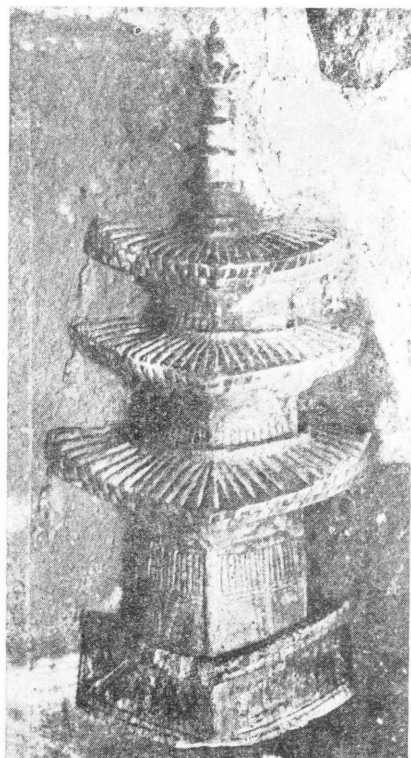
このように兩塔は左右相對しながら、その手法を異にしているのである。

附記 この石佛は昨年十月三・四兩日に互つて搬出され、奈良國立博物館に保管されている。

三 石造屋蓋

右の三尊像を入れた石造厨子は今その屋蓋だけを残し、これが堂の脇に置かれていることについては既に觸れた所である。石佛に比べてやや荒れ目の凝灰岩より成り、同じく火中して破損が甚しい。

正面一二二糧、側面八四糧、高約五〇糧を測り一石より成つてゐる。屋根は鋳葺で行基葺の瓦が一枚一枚克明に刻み出され、切妻部



挿圖 6. 塔婆形（向つて左）

の降棟と寄棟部の隅棟とは何れも堆く浮彫りされているが、正面に比べて側背三面は手法が簡略されている。

大棟の兩端は大きく缺損し、隅棟も又途中で缺けているので、その先端の構造は明かでない。軒先は比較的厚く、側背面の殘存部では六糧を測り、軒口はやや内側に切つてゐる。軒裏は奥行九糧、内へ一糧程上り、そこに桷を刻みだしている。桷は角で背は低く、幅三糧、高一糧、一重で正背面では約五・五糧間隔に疎に並び、兩側面ではやや狭く密になつてゐる。隅木は缺損してその形は明らかでない。

その下は正背面では奥へ二段の繰込みになつてゐるが、兩側面ではただ一段のように見える。但し正面ではその第一段の奥行は浅く、二・五糧内外、第二段は深く約一三糧、その先は極く薄く〇・五糧の繰出しになつてゐる。

ここに左右に丸く凹んだ穴がある。右側のものは深九糧、その斷面は向つて左へ二段になり、口徑一糧、前後ではそうした段をなさずに徑七糧である。左側のものはこの部が崩壊しているので僅に徑七糧、深一糧の凹みとしてその痕跡を留める程度であるが、對稱の位置にあるので、同じ用途の穴であつたことが考えられ、もと石扉の軸受であつたことが知られる。

その内陣の天井には特別の仕組はないが、奥壁に向つて僅に上りその差一・五糧、その先に深三・〇乃至三・五糧の溝が彫られ、この溝は左右兩側面にも續き、ここに奥壁と側壁が嵌込まれていたこ

とが推察される。この溝は奥壁部では長七二糎に幅二〇乃至二一糎、側壁部では四七糎に一〇糎を測り、側壁の間に奥壁を立てたことが知られる。この奥壁と側壁の外側は二糎内外の薄い繰出しの段になり、軒廻りを構成している。破風も一部缺けているが、妻飾はなく素面になっている。

屋根の全形はその正面と背面の手法に精疎の差があるだけではなく、大棟がその中心より心持後寄りに上げられているため、切妻部、寄棟部共に屋根の前流れが後流れよりもやや長く又それだけ緩くなっている。但しそのやだるみに至つては切妻部には殆ど認められないが、寄棟部には僅にそれが注意され、ここにこの屋根の構造が單なる入母屋造でなく、所謂鍛葺と見なし得る據り所がある。その軒の反りは緩く、兩端で僅に二糎程度の反りを示すに過ぎない。

このように見て來ると、これは石造厨子の屋蓋として、その下に側背三面に板石の壁を立て、正面に石屏を嵌めていたことが認められるであろう。而も天井に残っている奥壁の溝を見ると、三尊石佛の寸法と同じであつて、ここにもと三尊像が奥壁として立てられていたことが明らかであろう。側壁は厚さ約一〇糎の板石を奥壁の外側に立て、正面には軸受けの穴が二つ左右對稱的にあるのであるから、ここには夫々幅約四〇糎、高一〇〇糎内外の板石の屏が軸で吊られ、兩開きに作られていたことが窺われるのである。そして今は亡き側壁や屏にも、恐らく精巧な手法で彫刻が施されていたろうことが、屋蓋や三尊像から推察されるのである。

更にそれ等が同じく臺石の上に立てられたことも殆ど疑いなく、これが又基壇の上に立てた柱狀の石材の上に安置されたいふこと、かの法隆寺の玉蟲厨子のようなであつたことが類推されることであるが、部材の見られぬ今日では單なる推定に留ること云う迄もない。

四 考 察

以上古法華石佛について私達が觀察し得た所の概要を述べたので、私達は更にこの石佛についての考察した所を記さなければならぬのであるが、ここではその二三の思付きを記して參考に供するに留め、詳細は他日を期することとしたい。

先ず第一に取上げなければならない問題は石佛の沿革であろうが、これについては詳らかでないという外ない。一部の人々はかの一乗寺はもとここから移建したので、ここを古法華というのだと信じており、又一部の人々はこの石佛は天竺から傳來したのでこれを唐佛というのだと信じているが、どれも單なる傳承に過ぎないこというまでもない。ましてこの石佛が元來ここに安置されたものかどうか。若しそうだとするとどのように安置されたものか。即ちここに伽藍が建立され、その一堂に厨子佛として安置されたものかどうかであり、若しそうであつたとすると、その堂はどのようなものであつたかということであるが、こうしたことは少しも判つていなかった。

後に説くように私達はこの石佛がこの地の産石を以て、この地で

製作されたものとの一應の確信から、附近からきつと關係遺物が檢出されるであろうと考へて調査を續けていた所、最近になつて觀音堂を中心にして、須惠器や土師器の破片がぼつぽつ發見され出した上に、更に西方約〇・五^{註⑤}籽を隔てた地點に古瓦片の散布していることを探知するようになった。そこは北方に聳える笠松山から南に延びた尾が、緩い斜面となつて溪流に臨んだ所で、規模は大きくはないが、伽藍を營むには恰好の地形である。ただ古瓦片というても布目瓦の破片ばかりで、軒端瓦などはまだ發見されていないので、その時代を判定することは出来ないが、相當早くここに堂宇のあつたことは確かであり、かくて問題解決の端緒が開かれたかのように考へられ、引いてはこの古法華を彼の一乗寺の舊地とする傳承が、改めて私達の注意を引くようになった。

そこで先ず考へられることは、兩者の距離が近いことと共に地形がよく似ていることである。即ち直線距離が約三籽に過ぎず、その寺地が共に東から西に開ける溪谷の源頭を占め、その地形が又彼の元亨釋書法華山寺の條に、其山八朶故爲號也とあるように、連山に取圍まれたたゞまいが全く似ており、ただ異なるのは加古川中流地方と、播磨の國府を結ぶ古道と考へられる縣道の南側にあるか、北側にあるかというだけである。

次に法道仙人の開基と傳へ、白鳳佛若干を藏する一乗寺の境内から、その古さを立證する遺跡や遺物が發見されていないことと共に、寺地そのものが彼の元亨釋書に印南郡とあるように、加西郡に

入れるには不都合な地形を占めており、少くとも當寺の國寶三重塔が建立された承安元年（一二七一）以前に、加西郡内から移建されたものでなからうかとの疑問を生じる可能性が強く、この場合現在知られている郡内の廢寺跡からの移建とは考へられないのに對し、少くとも一乗寺のものよりは古いと考へられる古瓦片が古法華で檢出されたのみでなく、この三尊佛が發見されたことなどからして、傳承のように古法華が一乗寺の舊地であるように、一應考へられるのであるが、それは尙想像の域を出ないことであり、今後の調査に期待すべき課題であつて、今は先ずこの石佛自體についての私達の考察を加えておくべきであらう。

即ち石造厨子としての屋蓋と、奥壁の三尊石佛を残すに過ぎないが或る程度復原してみることが出来ることについては既に述べた通りで、鍛葺の屋根を行基葺に葺下し、大棟の兩端は今大きく缺損しているが、もとここに鴟尾を上げていたことが想像され、その缺け口の様子から、丁度その基部に當るものと考へられるのである。隅棟も途中で缺けているのでその先は判らないが、稚兒棟などはなかったと思われる。かくて屋根の構造形式がいかに彼の法隆寺の玉蟲厨子に似ていることが知られよう。軒廻りの斗拱や隅木など特に明らかでない點が多いが、角柱を疎に並べていることは彼と異なる所で、この軒廻りの様子は寧ろ同寺の押出三尊佛の厨子に近いといえるようである。^{註⑥}

その柱形も又判らないが、若し刻み出してあつたものとする、

或は玉蟲厨子に近いものであつたかとも想像される。それは屋蓋の裏の側壁を嵌込む溝に、特に丸く造出されたと思われる跡を認めないからである。扉も又遺材を見ないので詳らかでないが、三尊像の寶塔の手法からして、或は上半に連子窓を刻んでいたように思われる。これが兩開になつてゐたことは軸受の穴によつて明らかであるが、彼の厨子が蝶番で吊つてゐるのに對し、これはその用材の關係からであろうが、本格的に軸摺りにしてゐるのは注目に値しよう。ただここで疑問の残るのは向つて右の軸穴にあつて、穴が二段になつてゐることであるが、内側へ向い一方だけがそうなつてゐるの、軸座等が付けられていたものとは考えられない。或は軸を嵌込む便宜のための穴であろうか、それとも設計や施工に狂いがあつて、彫直したものと解すべきであろうか。

厨子の側面には扉を嵌めることなく、一板石の側壁を立てたものと推測される。その基壇や須彌壇等についてはいふべき據り所がないが、玉蟲厨子に見るような構造であつたと推定することは許されないだろうか。殊に屋蓋や三尊佛の手法に鑑み、今は亡きそれ等の部材の夫々にも、又精巧な彫刻が施されてゐたろうことが考えられ、その散佚に限りない愛著を覚えさせられるのである。

次にその奥壁の三尊像について見ると、その佛身は殆ど剝落してゐるので多く取上ぐべきものはないが、尙左右の脇侍には手足など一部存して原狀を窺わしめるものがある。

即ち左脇侍の右足に残る薄衣の輕いリズミカルな襷の重りは、彼

の香藥師や法隆寺壁畫の脇侍に見られる線であり、その裾が軽く揚り左右に疊む裳の襷は直截に太い縦の線と、裾を縫う流麗な曲線とを描き、その下にあらわに、むつちりと豊かな足首を覗かせてゐる。この裳の襷の捌き方やその裾の短か目に足首を現わすことなどは、共に所謂白鳳佛に通じる形である。又右脇侍の右手を見ると、その肩から腕にかけての豊かな肉付、手首から指へかけてのふくやかな丸味は、豐醇な肉付の一斑の現われである。その肩から腕に懸つた天衣は、一巡して手首の後にその端を覗かせ、それが一度指に支えられ、その先は大きくくねつて翻つてゐる。この天衣の捌き具合や、先の裳の左前が軽くめくれて三條線を刻むこと等は、彼の寶慶寺の石佛群等にはつきりと見える形式である。又左肩から右胸脇へは大様に條帛を懸け、右肩には環珞の残るのが認められる。腰には特に帶を廻らしてゐるが、これは法隆寺壁畫の諸菩薩や、勸修寺繡佛等に多く見る例の如くである(挿圖7)。

蓮華座は大様の花瓣を重ねる請花形式のもので、これも又法隆寺壁畫の諸菩薩像や勸修寺繡佛の中尊等の臺座として多く見る所のものである。これを獅子が頭上に支える形は、まさに奇抜の構想であり、殆どその例を見ない所である。その獅子形が左右共に四肢を張つて跳躍し、中央の香爐形に一枝を揚げて觸れようとする所誠に活々として躍動的である。獅子像と香爐形とは三尊形式に多く現れる所であるが、普通後肢を曲げ前肢を立てて坐る形である。こうした兩獅子の姿勢も又珍しいものとしなければならぬ。

その香爐形は中央の山形が剝落してしまつてゐるが、尙その左右に延出た枝葉も、大きく開いて漸く花やかである。これに近い形は法隆寺壁畫の淨土圖に見られる所であり、遠くは中國の北響堂山の中洞寶壇に現れるものに似ることも留意すべきことであらう。^{註⑥}

中尊の倚座は精緻である。それは特に脚部において著しい。鋸齒

様に近い外縁を付け、大様に反

花風に開いた蓮座の上に、球狀、

德利狀を繋ぎ、その途中四ヶ

所に釦狀に鑲を付ける。この柱

狀の形は廣く背障の欄や石龜の

柱等にも用いられている所であ

り、その例は乏しくはないが、

これは矢張り華やかに又精緻で

ある。多くの臺座の例ではここ

に獅子形を置き、その獅子座で

あることを現しており、そのた

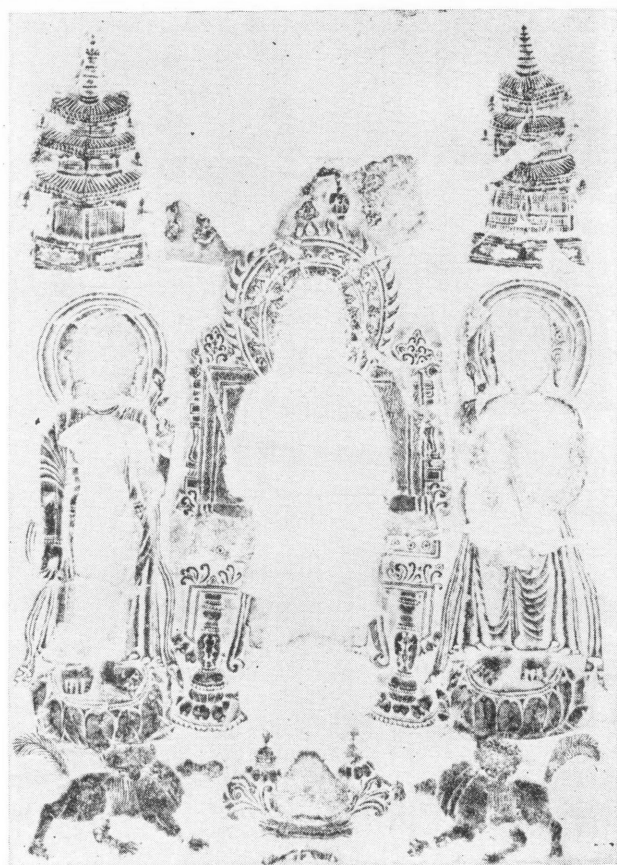
めに時には法隆寺壁畫等にも見

えるように、獅子像を重複使用することにもなつてゐるが、これに

あつてはその繰返しを避けているわけである。

この上の座板との間の忍冬文はパルメット形等を組合せて華やかにされているが、勸修寺繡佛の場合等蔽手狀に忍冬文の群るのと規を一にしている。その上の座板の小口の華文は又彼を簡略にした形

である。背障の兩側は肩に寶相華様の忍冬文、パルメットの組合せの文様を飾り、側縁には寶珠、花瓣と耳朶狀の曲線とを並べてゐる。これは勸修寺繡佛の動物文系のものを簡略にしたと見るよりは、寧ろ法隆寺壁畫の彌陀の背障側縁等が唐草に蓮華をあしらつた植物文系のものであるのと、その規を一にするものとすべきだろう。



挿圖 7. 三尊像拓影

光背についていえば、先ず三

尊通じてその形が圓光形式であ

りながら卵形に近く、特に脇侍

にそれが目立つてゐる。こうし

た例は遠くにこれを求めるまで

もなく、近く法隆寺の磚佛や押

出佛等にも見る所である。ただ

中尊の光心の異様の華文やその

外側の忍冬文は、この石佛に好

んで用いられたパルメット形の

使用であるが、この例は他に多

く見ないようである。この文様

の系統はいわばC字形繋ぎの唐草文であり、その中心部だけを解いて並列したものが内圈のものであり、その連續の弛んで散つたのが外圈の文様であると見なすことも出来るであらうか。それとも環繋ぎ唐草文が華文に近付いて光心のものとなり、波狀唐草文や飛雲文等に近付いて外周の文様となつたと見るべきものであらうか。

脇侍の寶冠はその一部残っている所から推して、ここにも唐草文の使用が目立つのである。左右兩側には華文を二つ重ね、そこから忍冬唐草が延びて正面に至り、合わさつてパルメット形を作るものようである。これに近いものは東大寺大佛蓮瓣毛彫の諸菩薩像等に見られるのであるが、又一乗寺金銅聖觀音立像や法隆寺橘夫人念持佛の脇侍等もこれに類するものといえよう。

三重の寶塔については色々問題があることと思う。先ずその塔形についていえば、向つて右の塔が全體に丸味を帶びその基壇部が二重のように見える。左塔では各層共一面を一間としているのに對し、右塔では初層を二間、二三層は柱形を除くが、中間に斗拱を一組入れている。この右塔の異形についてはその意味が判らないが、更にその二重の基壇のように見えるものも、先には一應勾欄と解して置いたのであるが、或は何か別に特殊な壇として基壇の上に築き塔形に應ぜしめようとしたものかも知れない。塔形が全體に丸味を帶びることは多角形を示すものであり、各層軸部の一面の柱間に斗拱を入れることは、一面を二間としたものを示すのでなく、實は二面を意味するものと見れば、この塔は八角塔ということになる。然しこれにも色々落付かぬ點があり、當代の塔婆の遺例にもないことであるから無理のようで、ここでは一應の考察を記するに留めて置こう。

次にその細部について述べると、兩塔共に槓が方形二重であることも異様である。一般遺例から見ると一軒であるか、或は地圓飛角

の二軒であるべきであり、若しこれが當時實在の木造塔婆の手法を寫したものとすると、これは誠に注目すべき事實といわなければならぬであらう。然しこれにも實際には色々な問題があり、一概にそう寫實的なものとも見られない點があるから、一應便宜的な表現として問題を殘しておこう。このことは又斗拱の形についてもいえよう。一見雲形斗拱を示すようであるが、これも工作上の便宜からの表現に過ぎないのであらう。又兩塔共にその相輪部も異様である。その露盤、伏鉢等は明白でなく、寶輪も又四輪を數えるようである。これも矢張り便宜的なものに見受けられるのである。その上方の手法が又兩塔で多少の相違はあるが共に請花を刻み出しており、請花で龍車・寶珠等を支えることは、法隆寺五重塔の塑像中の舍利塔にあつて、その八角の天蓋の上に反花、半球形、寶珠を重ねているのに最も近く、又彼の百萬塔の相輪における五輪の上に設けた大形の輪形よりも上の手法が、或は類縁の様式であるように思われるのである。然しここに取上げた遺例はどれも小さい工藝品であつて、共にその寫實性については大いに問題があらう。現存する塔婆の例から見ると、この請花の部は水煙に相當する所であつて、そこにこうした請花をつける例は見ないようであるが、現存する日本の木造塔婆はその形式の固定した後のものであるから、この相輪部の異様さもあながち非實在的なものと、推斷することは謹しむべきかも知れない。

更に基壇の側面を一區とし、そこに入れた格狹間の異様さも見逃

することが出来ないであろう。兩塔その規を一にしているのであるが、その輪郭は上下相似し、圓弧を深く細く刻み、一方に八葉形をなしている。一般の格狭間と異なり下縁も同じ圓弧を描くことに特異さが認められる。これをも又新しく見出された格狭間の一様式とすべきなのであろうか、それともこの期の一般の格狭間の便宜的變形であるとするべきであらうか、俄に斷じ得ない所である。

ここに刻み出された二基の三重の寶塔といい、石造屋蓋といい、木造建造物の遺例の少い今日、殊にそれらが造立以來の姿を留めているとはいへ、それが本來のままに伝えられているとは、その材質が木材であるが故に認め難く、後の修補によつて可成りの變動のあることが認められているのに對し、これは脆弱な凝灰岩製である上に火中し、風化磨滅も甚だしいとは云え、今日造顯のままの姿で見られることは、遺例の少い日本古建築史上に貴重な資料を提供するものとして、私



佛 石 目 繁 8. 圖 挿

達のこの石造厨子發見の意義は大きく評價されるものと確信している。殊に石造彫刻であるために、その細部の手法に現存す

る木造建築物に見られない異様な點が多く、それだけに記述に當つて私達は多く疑問の點を残したが、これは今後それぞれの専門家の研究に期待し、終りにこれを全體として眺め、特に石佛の系譜なり性格なりについての私達の考察を付け加えて置こう。

先ず三尊像とこれを納めた厨子であるが、その類例を他に求めるとすると、彼の玉蟲厨子が最も近いこと、今や改めていう必要がなからう。尤も玉蟲厨子には今三尊像を缺いているが、もと安置されていたらしいことは多く説かれていた通りである。その屋蓋の構造が殊に近似することは既に述べた所であるが、臺座等については一應玉蟲厨子の形式からこれを類推するにとどまり今は不明という外なく、又別の意味で同じ法隆寺の押出佛厨子も挙げられるのであつて、半肉様に尊像を押出した銅板を奥壁に固定した手法は、この厨子にあつて、三尊像を奥壁としているのに、いかにもよく似た手法註⑥であるとはいへ、その屋蓋の構造においては形を異にするが、その他は寧ろよく似ているので、こういう形式も又一應考慮されなければならぬであらう。

三尊像について見ると椅座の中尊の左右に脇侍が立ち、夫々中尊に向つてやや腰を捻り、片手を曲げて持物を捧げる像容は、彫刻に繪畫に又工藝的な押出佛や磚佛等に多く類例を見る所である。ただそれが半肉の石佛というに至つてはその類例は少く、僅に大和石位寺の石佛を挙げ得るに過ぎないが、最近私達が發見した同郡加西町註⑦繁昌の石佛も、中尊坐像の五尊佛ながらこれに近いものといえよ

う（挿圖8）。尙強いを求めるならば頭塔の石佛も、その彫りは薄肉ながらこれに加えてよからう。

板石を矩形に切取りその周縁に縁取りした手法は、中國の寶慶寺の石佛群等に似るものといえよう。尤も寶慶寺の石佛も、もどんな形で安置されていたか明らかではないが、もと光宅寺の塔内にあつたといわれている所からすると、或は塔の佛龕等の内に安置されていたものでもあろうか。もし佛龕の奥壁等として嵌込まれていたものとすると、この古法華石佛が厨子の奥壁として安置されていたことと、頗る似た形を示すものといえよう。その石佛と古法華石佛の様式の類似も既に述べたとおりであるから、一段と兩者の近似が強く考えられる譯である。

若しそれ素材の別をいわないならば、この石佛に近いものとして磚佛を擧げることが出来るであらう。その例の多い倚座三尊像磚佛はもとより、法隆寺押出五尊像と同型と考えられている當麻寺の磚佛等は、その尊像の様式極めて近似するものであり、又その輪郭を長方形にして四周に縁を取ることも又同じい。磚佛がもと堂内の壁面等に嵌込まれたことは、近時次第に明らかにされつつあるが、そのことは又この石佛が厨子の奥壁として安置されたことに通じるものがある。更にいえばこの磚佛と最も近いとされる押出佛が、現に法隆寺にあつてその厨子を伴うのであるから、いよいよ磚佛と押出佛とこの石佛との關係の密接さが窺えるようである。

以上私達は古法華石佛を考察するため可能な範圍に過ぎないが努

めてその類例を求め、その類似點を指摘して來たのであるが、更にこの石佛自體の獨自の手法も又注意しなければならないであらう。その精緻な技巧については改めていう迄もないが、中尊倚坐して兩脇侍蓮華座に立ち、上に天蓋を吊り、下に香爐形と獅子を相對して配した構圖は一般例に従う所であるが、その三尊像と下の獅子等との組合せに特異なものがあり、更に上部左右に塔形を刻むことは、他に殆ど類例を見ない所であらう。一尊の上部左右に塔形を刻むことは印度等にも例の多いことであり、三尊像の龕側に三層の塔形を刻むものは、雲岡石窟等に多く見る所ではある。然しこのような形の三尊像における塔形は稀であらう。

こうしてこの三尊像の構成に獨自のものが現われているが、それもその類似を絶するものとは斷じ得ないであらう。それには矢張りその祖型があり、その間幾多の變遷の過程があつたことと思う。私達はただそれを詳しくしないだけなのであらう。それについて思合されるのは雲岡石佛等における佛龕であらう。その一つは龕側左右に三重塔形を刻み、内部に交脚中尊を中心とする三尊像を入れるものである。例えばその第十・十一窟の幾つかの小佛龕がそれである。^{註⑥}今一つはそれに並ぶ佛龕中に坐像の中尊を中心とする三尊像の寶壇の内に、中央に香爐形を置き左右に供養者の像を刻み、その端に獅子の四肢を立てた形を刻むものが注意される。^{註⑦}この二つの龕がその龕形を崩して組合されば、やがて古法華石佛の様式が生れるわけであらう。

然し翻つて考えて見ると實は一方は龕であり、一方は厨子の奥壁であつて兩者その性質を異にする。一方は奥行を持つて立體的であり、一方は一枚の板石の面に刻まれて平面的である。ただこの石佛を三尊像板石だけでなく、厨子を含めて全體として見れば、始めてこれは佛龕に近く、特に屋形龕と同じものといえるであらう。この石佛奥壁はいわば龕にあつて奥行を持つた造像形式を、平面化して壓縮したとも云えるであらう。即ち中尊の左右の側壁にあつた脇侍は中尊と同じ壁面の左右に移され、佛龕の外側にあつた塔形は内に入り、後退して脇侍の上に小さく並ぶようになつた。又寶壇の壇形は失われて同じく後退し融著し、獅子は脇侍の蓮華座を戴くように、香爐形は中尊の臺座を支える形となつたと見られるであらう。

このような龕形の喪失は、中國本土にあつては唐代に現れることといわれている。石窟における諸像は平面に並びその框、輪郭として龕の痕跡を留めるに過ぎないことは、多く説かれていた通りである。この古法華石佛の三尊像板石は、石窟からそうした一劃を切取られた形ともいえよう。その輪郭の縁は龕側に當るものである。このような形の石佛が寶慶寺石佛として存することは既に述べた所である。これを瓦磚に移すと磚佛になるであらう。多數一連の小形の磚佛は暫く置き、獨立の大形の磚佛は正にこれに相當するものであらう。先に指摘したこの石佛と磚佛の類縁性は、もここに基くものであらう。

それではこの石佛は何時造顯されたのであらう。石造屋蓋の手法

が玉蟲厨子に近いことはその製作年代が餘り隔つていないことを推察させてくれるだろうし、右に述べた三尊像の様式が初唐の作例に類する所からもそれが窺えるであらう。即ち私達が奈良朝前期所謂白鳳時代の造顯にかかるものと推定する所以である。

最後に私達はこの石佛の製作された場所について考えて見たい。既に述べたように屋蓋と石佛とは精粗の差こそあれ、等しく凝灰岩で出来ている。従つて先ずその素材の原産地が問題になるわけであるが、加西郡の南部特に古法華山を中心とする一帯は古くから石材の産地として知られ、その北麓では長石おさと呼ばれて今も盛んに切出されている。

殊にこの地方は石造遺品の夥しく見られる所で、その殆どが又凝灰岩製であることがこの際注目し値しよう。而もその作例が遠く古式古墳の時代に遡り、所謂古墳時代を通じて製作された石棺の數の殆ど想像に絶することは、近時私達の調査によつて明らかにされつつある所であるが、中には雄大精巧な遺例も屢々見受けられ、その石作の技術の幽遠にして優秀なことが知られるのである。

更に上代の寺跡について見ても、心礎はもとより柱礎にも遺例が存し、殊に塔の露盤請花等にも石造遺品が見られ、前代註⑥に續いて盛んに石作が行われたことが知られ、これが中世に入ると一段と盛行している。即ち加古川下流地方の中でも加西・印南・加古三郡に互る地域は、鎌倉時代以降石棺材を利用して造顯した石佛板碑の遺品

の數殆ど枚舉に遑がなく、一の地方色を呈している外層塔、五輪塔その他の作例も又頼しく殘存している。

近世以來建築用石材として今日尙盛んに切出されていることは改めて云うまでもないが、その初めは北條町高室が有名であり、その産石は高室石と呼ばれた。當地の俚謠に

石屋三分に百姓一步殘る六分は皆役者

と謠われた土地であるが、近代に入り石屋も役者も振わず獨り長石の名が高くなつてゐる。

更に石質はやや異なるけれども、印南郡には早く風土記に現われている石寶殿の龍山石があり、今に盛んに石英粗面岩質の石材を産出している。このように豊富な石材が古くからふんだんに使われていたことから、早くからこの地方に優秀な石作の技術が導入されていたことが知られるのであるが、記録の上には残っていない。この場合傍證になるのは播磨國風土記であろう。同記によると印南郡大國里や飾磨郡安相里に石作連の名が見え、何れも古法華山から左程遠く隔つていない。^{註⑥}恐らくその頃この地方にも石作連が居て盛んに活動したものであらう。

こうした豊富な原料と古い技術を背景にして古法華石佛は發見されたのであるから、例え天竺傳來の唐佛であるとの傳承があり、一見それ自體が將來品らしい構圖を持ち、我が國に類例のない精巧無比の石佛ではあるが、私達はこれを發見した瞬間から、この山中で製作されたものであらうと直感したことであり、後にその石質の鑑

定を地元の専門家に求めたのであつたが、彼も又長石に間違いないと答えてくれ、一層その確信を強くしたことであつた。

即ち大陸將來の粉本により繪畫に描かれたものが法隆寺壁畫になり、石材に刻まれたものが古法華石佛になつたもので、押出佛や磚佛はもとより、當代の佛教遺品の多くがそうであつたはずであり、この場合強いていえば、法隆寺壁畫はやや時代が下るが、古い手法を残すために古い粉本を用い、古法華石佛はそれが我が國に齎されて間もなく用いられたものと、少くとも今の私達は考えているが果してどうであらう。

おわりに

加西町に住む私達の友人植永定治氏は、この地方を詠じて草深き鴨の國原というている。都會に住む私達にとつては誠に我が意を得た表現であると思われる程僻遠の加西郡であるが、調査の進むにつれて時代が溯れば上る程その文化の水準の高かつたことが、殘された古文化財を通じて強く看取され、花やかであつた古代の様相が髣髴として眼前に泛ぶようになった。

それ等が多くいわれるように搾取の殘滓に過ぎないものであつたとしても、そこには又搾取さるべき餘裕即ち自ら經濟的基盤がなければならぬであらう。即ち加古川支流の滿願寺川に注ぐ枝川によつて、低山性の盆地は幾條もの谷筋を展開し、その多くは南北に開け、南を受けて朝日夕日が照り輝き、用水に事缺くことなく、洪水

の災害に悩むことのないこの地方の、古代の人々の平和な生活が無視されては成り立たないことではなからうか。殊に上代以來夥しく残る佛教遺物は、一面これを残した住民の厚い信仰心が窺われ、物心共に豊かに満ち足りた彼等の生活の跡が偲ばれることである。

今や私達はこの目新しい古法華石佛について私達の懐いた驚歎と疑問を有りの儘に述べたのであるが、要はこの石佛が年久しく播磨の山中に忘れられていたことを世に告げると共に、今迄に私達の觀察した所の概略を記して少しでもその實狀を明らかにし、以つてこの注目すべき日本の佛教遺物を世に送り出すハナムケをしたいと念願するに外ならないためである。

註① この探査には高井の勤務する西宮市の甲陽學院高等學校の生徒有志諸君の勞に待つ所が多い。記して感謝の意を表する。

② 國寶全集 第十一輯 二〇一

③ 頭塔の石佛群の中にもこれと似たものがあるが、やや崩れている。

④ 長谷寺の銅板法華說相圖の多寶塔の初層部が参照される。

⑤ ②に同じ。

⑥ 既に述べたようにこの石佛は、古法華石佛から東北約八軒を距てた加西町繁昌字天神の式内古社乎疑原神社境内の新しい石造厨子に安置されていた。同じく凝灰岩製で高四四厘の小形のものである。去る十月古法華石佛と共に奈良博物館へ移管された。

⑦ 「支那文化史蹟」第一輯38—41圖 水野清一氏「雲岡石佛群」圖版56

⑧ 「支那文化史蹟」第一輯41圖 「雲岡石佛群」圖版56

⑨ 「播磨上代寺院址の研究」印南郡中西廢寺の項参照。

⑩ 印南郡大國里は印南丘陵の南端附近の西神吉村大國が當てられ、中西廢寺はその東隣中西にある。恐らくこの石作連はその南方程近い龍山を背景とするもの

であろう。播磨郡安相里はその丘陵の西縁地方と想定されており、そこに見える長畝川はその先は古法華の谷に發して播磨郡に入り、印南丘陵の西南麓に沿うて東南流し、末は印南郡に入り播磨灘に注ぐ今の天川が當てられている（播磨風土記新考）龍山は又その下流の東岸に近い。この川筋に沿うて古法華山や高室の石山に連關を持つことも易いことであつたと思われる。

附 記

本稿を送つた後田中塊堂氏著『日本寫經綜鑒』に、近江石山寺藏天平六年書寫播磨國賀茂郡既多寺の大智度論があり、その卷第五六に石作連知磨、五七に同石勝の名の見えることを知つた。既多寺の名が現存しない今日どこにあつたか知る由もないが、既に記したように賀茂郡内には奈良朝以前の廢寺が七ヶ所知られており、そのうちに含まれていけるとすると、加西郡泉町（舊在田村）殿原の廢寺を當ててよいように思われる。そのすぐ東に北村という部落があり、假にその村名が後に附けられたものとしても、何か古い由緒があつてのことと思われ、この廢寺を既多即ち北寺と呼ぶにふさわしく、郡の北部に位置している。

この廢寺についても『播磨上代寺院址の研究』に紹介されているように、近年まで寺址に残つていた塔心礎の形式と共に、その出土單瓣八葉蓮華文軒丸瓦の様式から、この寺の創立が白鳳時代に溯るものと推定され、殊にこの丸瓦と殆ど同型のもの加同郡が西町の繁昌廢寺やその附近の尼ヶ池瓦窯址から出たことが、最近の私達の調査で明らかにされた。

奥書に見える石作連を賀茂郡の人と連斷することは、いささか行過ぎのそしりを免れないであろうが、今の私達には無視し得ない名であり、參考までに附記しておく。